パンチャラートラ初期のヴューハ説

——*Mahābhārata* 第12巻 Nārāyaṇīya 章——

松 原 光 法

1.

古代インドの大叙事詩『マハーバーラタ』第12巻 (Śānti-parvan) のナーラーヤニーヤ章 [MBh 12.321～339] は、おそらく初期パンチャラートラの教説を表明する現存最古の文献であろうと考えられる。そこでは、すでに別の論稿において検討した「パンチャラートラ」という語の用法(1)ばかりでなく、さらには教義上の重要な諸点はもちろんのこと、伝承上の他のいろいろな事項についても後代に成立した多数のパンチャラートラ・サンヒターとつながりの深い特徴が顕著に見うけられる。たとえば、

1) ナーラダ仙の訪問したという「白い島」Śveta-dvīpa 伝説 (MBh 12.322.8-12, 323.23ff., 325.1)

2) 七人のチトラシッカンディンたち (MBh 12.322.26ff.)

3) ヴァス・ウパリチャラ王 (MBh 12.322.17ff.)

4) エーカタ仙 (MBh 12.323.6ff., 326.11 & 79)

などの故事や伝説に、多くのサンヒター聖典が種々に繰り返して言及をしているのである。(2)

註 1) Cf. M. Matsubara, Introduction to "Chapters on Pañcarātra Theology in the Ahirbudhnya Saṃhitā [1]," 『密教文化』 No. 167 (密教研究会、1989), pp. 117～111.

2) See *op. cit.*, p. 118 note 11.

このような最初期の文献ナーラーヤニーヤ章に説かれたパンチャラートラの教説について詳しく分析してみなければならない重要な問題を提示するのが、インドの哲学宗教思想上ヴェーダーンタ学派の巨匠として名高いシャンカラである。このシャンカラによれば、『ブラフマ・スートラ』2. 2. 42〜45は、バーガヴァタ派が主張するところの「パンチャラートラの定説」Pāñcarātra-siddhānta を論難する一節である。しかし、その一節の論難はパンチャラートラの教説の全体にかかわるものではない。たとえば、

1) 最高神の存在そのもの

2) 最高神が動力因であり、かつ質量因であること

3) そのような最高神が種々様々な姿を取って変現すること

4) 解脱とは苦悩なき状態となってバガヴァットに到達することである

(Cf. MBh 12.326.19, 24 & 41)

などという点は、いずれも批判されることなくすべて完全に承認されている。そこで『ブラフマ・スートラ』が論駁するのはパンチャラートラのヴューハ説に関する極端に特殊な問題点であって、そのような諸点に関連するシャンカラの註解を要約すれば、おおよそ次のようになるであろう。ナーラーヤニーヤ章の主要関連個所をカッコ内に付記する。

[A] 唯一なるバガヴァット[世にも尊き崇高な神]のヴァースデーヴァは≪究極の実在≫ paramārtha-tattva である。[3] この神は自己自身を、さらに4種類に分割して (caturdhātmānam pravibhajya)[4]

---

3) 拙稿「Ekāntin と『バガヴァッド・ギーター』―― ヴィシュヌ派初期の唯一神論」、『高野山大学論叢』第25巻 (1990)、8〜9 ページ参照。

4) Cf. MBh 12.339.20 (catur-vibhaktaḥ Puruṣaḥ), and :
catur-mūrtir ahaṃ [=Vāsudeva, 22a] śaśval loka-trāṇārtham udyataḥ /
ātmānaṃ pravibhajyeha lokānāṃ hitam ādadhe // ..... (MBh 7.28.23-25)
vibhajaty ātmānātmānaṃ Vāsudevaḥ paraḥ prabhuḥ // (SS 3.5)
SS 6.126 (vibhajaty ātmanātmānaṃ caturdhā).
Vāsudevādi-rūpeṇa caturdhātmānam ātmanā /
saṃvibhajyāvatiṣṭhe 'haṃ sarvam āvṛtya saṃvidā // (LT 4.26)

1) ヴァースデーヴァ(Vāsudeva) 2) サンカルシャナ(Saṅkarṣaṇa)

3) プラディユムナ(Pradyumna) 4) アニルッダ (Aniruddha)

という4現相の姿 (vyūha-rūpa) をとる。この4現相の間には、本来上のいかなる区別 (bheda) も存在しない。(5) それらは、すべて最高神のヴァースデーヴァそのものに他ならず (Vāsudevā eva hi sarve vyūhāḥ)、互いに無差別 (nirviśeṣa) であって、共通の本性を具えている (tulya-dharma)のであるから。(6) そうして、ヴァースデーヴァを最高我 (para-mātman, cf. MBh 12.326.24) として承認する点にも異議はない。

[B] しかし、サンカルシャナを個我 (jīva, cf. MBh 12.326.35 & 332.16b) に、プラディユムナを意 (manas, cf. MBh 12.326.36 & 12.332.15cd) に、アニルッダを 自我意識 (ahaṅkāra, cf. MBh 12.326.39) に当て はめて、根本原因 (prakṛti) であるヴァースデーヴァから結果 (kārya) である他の三者が順次に生起すると主張する点、

---

5) LT 4.23ab は4ヴューハについて、次のように言う。

naivaiṣāṃ vāstavo bhedaś cintanīyo divaspate ! / これら [4ヴューハ] の間に、実質上の区別を決して考えるべきではない。インドラよ。

Cf. AS 5.17-44.

Also see SS 3.6-7, 4.8-12, and 3.12ff. : ..... vyūhe 'smin ..... /
sādṛśyāt ṣaḍ-guṇatvāc ca samatvāc ca viśeṣataḥ // (12)
śāntatvān niṣkalatvāc ca na bhedo vidyate yataḥ /.

6) Cf. e.g., LT 4.21 : yady apy eka-guṇonmeṣas tathāpy ete hi ṣaḍ-guṇāḥ /
anyūnānadhikāḥ sarve Vāsudevāt sanātanāt //

たとえ、ただ一つの徳性が目覚めている (see LT 4.8-10) とはいえ、これら [下位の3ヴューハ] はいずれも6種の徳性をことごとく具えているから、永遠なる [第1ヴューハの] ヴァースデーヴァに比較して、すべて過不足のない存在である。 そうして、 彼ら [4ヴューハ] の身体 (eṣāṃ dehaḥ) は≪六徳≫よりなる (ṣāḍguṇya-maya) から、この世のものではなく (na bhūta-maya)、神聖 (divya) であって永遠 (sanātana) である (LT 4.22)。

Also see MBh 12.326.38 & 67-9, PauS 20.65-6, JS 4. 12-8, 13. 164, AS 5. 17-44, 10. 13-4, 52. 76-84, LT 4. 54cd-57, 6. 13cd-15, 10. 18-9, ĪS 24.88.

すなわち、宇宙太初の創造時に

1）最高我から個我が、 2）個我から意が、 3）意から自我意識が、

という順序をとって、それぞれが＜原因と結果の関係＞において生起する（cf. MBh 12.326.38-39, LT 6.6-16）、と主張することは不可能である。

シャンカラは以上のようにパンチャラートラのヴューハ説を取り上げた後に、その教説に含まれた問題点に対して入念な論駁を行う[7]のであるが、すでに注記しておいたごとく、シャンカラの＜理解＞——それは、ある意味でヴェーダーンタ学派の一伝承[8]と言い換えてもよい——は上記の要約の前半[A]に関するかぎりパンチャラートラ・サンヒターの教説と表現を正しく踏まえて、しかもそれを承認するから、実際に問題となるのは後半[B]の部分である。したがって、いまシャンカラの記す『註解』どおりにパンチャラートラのヴューハ説なるものを図示して見れば、その主要なポイントは全体として4ヴューハの無区別性を認めた上で、次のような因果関係を示すことになるであろう。

① ヴァースデーヴァ (Bhagavat, Paramātman, 最高我)
⇩
② サンカルシャナ (＝ jīva, 個我)
⇩
③ プラディユムナ (＝ manas, 意)
⇩
④ アニルッダ (＝ ahaṅkāra, 自我意識)

---

7) See G. Oberhammer, *Yāmunamuni's Interpretation von Brahmasūtra 2, 2, 42-45 : Eine Untersuchung zur Pāñcarātra-Tradition der Rāmānuja-Schule,* Wien 1971, pp. 15-24. この著者はシャンカラの論難するヴューハ説に古・新の二層を認める（pp. 21-4）。前記の要約に関連して言えば、その後半［B］はパンチャラートラの古説であり、前半［A］を後代に発達した新説と見る。

8) 後世の、しかもシャンカラを祖述する傾向のかなり強い一例であるが、Madhusūdana-Sarasvatī (ca 16世紀) の *Prasthānabheda* (ĀnSS 51, p. 11) にまで同じ解説が繰り返されている。さらに宇井伯寿『印度哲学研究』第4（岩波書店、昭和40年）、449-50ページ参照。

シャンカラがこのように解説したヴューハ説は、外見上では、ほぼそのまま『マハーバーラタ』の第12巻ナーラーヤニーヤ章における文面（MBh 12.326.35-7 & 332.15-6）に対応するとも言えるから、それが今日まで一般にはパンチャラートラに特有のヴューハ説であると考えられてきているようである。しかし、そのような理解がはたして学問的に信頼のおけるものなのかどうかについて、一度は詳しく確認しておく必要がある。そのような理解は、言うまでもない当然のことであるが、文献に記録された表現上の単なる類似にもとづく推測や憶断によるのでなくて、厳密に批判的分析を重ねた結果によって導かれるものでなければならない。

2.

さて、シャンカラによって攻撃されたヴューハ説の問題点は、次の二点に要約することができるであろう。

1） サンカルシャナと≪個我≫を、プラディユムナと≪意≫を、アニルッダと≪自我意識≫をそれぞれ同定すること。

2） ヴァースデーヴァからサンカルシャナが、サンカルシャナからプラディユムナが、プラディユムナからアニルッダが、というふうに4現相の上位のものが原因となって、その結果として下位のヴューハが順次に生起するという、三重の因果関係による顕現を主張すること。

まず第一の同定表示という点は、表記の単なる存否を探せばよいから、問題は少ない。そうして上にも付記したごとく、すでにナーラーヤニーヤ章の記録の一つが、表面的にではあるがそれをよく支持する。したがって古くはヴューハの下位3神を、おそらく有神論サーンキヤ(9)の開展説にも

9） R. Garbe 以来、無神論説であると一般に考えられている古典サーンキヤ学派の諸論書が紀元後1,000年のころまで有神論思想であったことを、J. Bronkhorst, "God in Sāṃkhya," *WZKS und Archiv für Indische Philosophie*, Bd 27(1983), pp. 149-161が指摘している。さらに、宇井伯寿「Sāṃkhyayogaについて」（『インド哲学から仏教へ』岩波書店、1976）、61ページ参照。聖者

とづいて jīva ⇨ manas ⇨ ahaṅkāra の展開に当てはめる教説が存在していたであろうことを容易に想像できる。しかしながら、後世に成立したサンヒター聖典の教説において、ヴューハ諸神の一々に関するそのような同定関係はごく微かな痕跡しか確認できない。たとえば『ラクシュミー・タントラ』の時代には、そのような事実はすでに伝説化しており、

Saṅkarṣaṇādayo devās traya ete purātanāḥ //
jīvo buddhir ahaṃkāra iti nāmnā prakīrtitāḥ / (LT 6.12〜13)

サンカルシャナをはじめとするこれらの3神は、古くからの神々であり、それぞれ個我（jīva）・意識（buddhi）・自我意識（ahaṅkāra）という名目で知られていた。

とただ付言するにとどまるのみならず、同『タントラ』ではサンカルシャナを ahaṃmānin (6.6cd) or abhimānin (6.9ab) とし、プラディユムナを buddhi (6.9cd) に、アニルッダを manas (6.10cd〜11) に配当する混乱があり、アニルッダではなくてサンカルシャナを ahaṅkāra に関係づけている (6.12ab)。また、首尾一貫していない点もあるが『アヒルブドゥニヤ・サンヒター』や『ヴィシュヴァクセーナ・サンヒター』においては下位の3現相が、それぞれ各原理の管轄者（adhiṣṭhātṛ）として、ヴューハ説そのものを教示する以外の場所で簡単に言及されているにすぎないのである。[10] 非精神的な原理そのものには独立して活動する能力がないから、上記の3原理が独自の作用を発現するようにヴューハを意識のある管轄者と認めるこの説は、時代がずっと後に下る南インドのシュリー・ヴァイシュナヴァ

Kapila は、言うまでもなくヴィシュヌ神の数多い Vibhava or Avatāra〔化身〕の一人である (cf. e.g., AS 5. 51 & BhG 10. 26)。AS 2. 37 は Paraṃ Brahma (AS 2.6 & 22) の epithets (cf. 2.40) 中に Kapila と Kāpila を含めている。Kapila の名が文献上はじめて現れるという ŚvetUp 5.2 については、宇井前掲書 92〜100ページを見よ。

10) 詳しくは、see Schrader, *Introduction,* pp. 39-41. Cf. VaiṣṇavaUp (ALS 8) p. 29 ; AS 6.53ff.(Aniruddha), 53.43 (Pradyumna), 55.42(Aniruddha), 59.23ff.

派系の諸論書においても言及されている。[11] オットー・シュラーダーは、ナーラーヤニーヤ章の古い同定表示がしだいに消滅していった主たる理由として、とくに自我意識のような不浄をも含む原理を絶対清浄なるべきヴューハに結びつけにくい点をあげている。[12] しかし、より一層有力なその理由が『ブラフマ・スートラ』以来のヴェーダーンタ学派による徹底した伝統的批判にあることを見落すわけにはいかないであろう。

第二の点、すなわち、因果関係によるヴューハの順次生起を説くと見る点に関しては問題が複雑である。それは一つの大きな問題にまで発展してヴェーダーンタ学派の伝承と『シャンカラ・バーシュヤ』の翻訳にも連なることになるかも知れないのであるが、基本的には、全体として通俗的宗教の立場にあるバーガヴァタ派の中に「ヴューハの順次生起」説のごとき観念がはたして成立しえたかどうか、という点からまず考察を始めるべきであろう。ヴァースデーヴァ・クリシュナに関しては早くから一つの神話圏または伝説圏が形成されており、彼の生涯や行跡を物語る伝説と神話は校訂本『ハリ・ヴァンシャ』や流布本の それの第2篇 (Viṣṇu-parvan)、あるいは『ヴィシュヌ・プラーナ』の第5巻にまとめられる以前から古代インドで民間にも広く知れわたっていた。たとえば、文法家のパタンジャリが『マハー・バーシュヤ』(on Pāṇini 2.2.24 & 34.1) の中で、またカウティリヤが『実利論』(14.3.44=365c) でとくに暴君カンサ王をはじめ、クリシュナ神話圏の主要なモチーフの一部分に言及するし、また古い碑文のいくつかにもそれらが記録されている事実が報告されている。[13]

---

11) Cf. e.g., *Śrībhāṣya* on 2. 2. 41 (ed. by Karmarkar, Vol. II, p. 698): tatra jīva-mano-'haṅkāra-tattvānām adhiṣṭhātāraḥ Saṅkarṣaṇa-Pradyumnāniruddhā iti teṣāṃ eva jīvādi-śabdair abhidhānam aviruddham, yathākāśa-prāṇādi-śabdair Brahmaṇo 'bhidhānam //, and *Tattvatraya* with comm. (ChSS 4), pp. 123-129. Śrīnivāsa の *Yatīndramatadīpikā* は、その説に言及していないようである。

12) Schrader, *op. cit.*, p. 39.

13) Pāṇini 4.3.98, Mahābhāṣya on 2.2.24 & 34 [.1], 4.1.114, Kāśikā on 6.3.6

クリシュナ神話圏におけるサンカルシャナはバラデーヴァともバララーマとも呼ばれる、ヴァースデーヴァ・クリシュナの兄である。この二人の兄弟の間で弟から兄が生まれるというのは、たとえ神話上の出来事ではあるとしても、一般民衆の通俗的立場ではあまりにも了解しがたい矛盾に満ちた独断であったに違いない。つまり、ヴァースデーヴァからサンカルシャナが生起するということは、いかに宗教的ドグマの権威づけをもってしても如何ともなし難いほどに古くからその二名の英雄伝説と神話とが広くインドに流布していた事実を碑文と文献上から確認することができるから、したがって、このような奇抜な説が民間に通用して広い支持を受け、長く伝えられ続けるというようなことはまず常識的にも考えられないことであろう。これに加えてプラディユムナは、クリシュナとルクミニーとの間に生まれた子であって、サンカルシャナの子供ではない。それ故に、プラディユムナの場合にもまた同じく奇異な不整合がいちじるしい。そうして、さらにアニルッダもまた、神話と伝説ではプラディユムナの息子なのであるからクリシュナの孫に当り、クリシュナの曽孫ではないのである。これは世界中のあらゆる古代民族に共通して認められる原則であるが、いかに精神的な先進国であったとはいえ古代インドにおいてさえも、人間の現実経験を無視したままで単なる名目上の空想概念が抽象的な観念論だけの内部で勝手気儘に神話化されるようなことはなかった。

このような神話と伝説上の事実から見れば、シャンカラが指摘するようなヴューハの順次生起説がもしも唱えられていたとすれば、それはバーガヴァタ派の主流内に本来からそなわっていた教説ではなかったであろう。

&c. ; and cf. S. Jaiswal, *The Origin and Development of Vaiṣṇavism,* 2nd revised ed., New Delhi 1981, pp. 52ff. & 68–71. *Uttarādhyayana Sūtra* 22 (SBE Vol. 45, pp. 112–5), and H. Jacobi's Introduction to SBE Vol. 22, pp. xxxi, note 2. VāyuP 97.1–2 and Gonda, *Viṣṇuism and Śivaism — A Comparison, London* 1970, pp. 51–2. J. Filliozat, "Représentations de Vāsudeva et Saṃkarṣaṇa au IIᵉ siècle avant J.-C.," *Arts Asiatiques* 26 (1973), pp. 113–123. Also cf. e. g., Gopālottaratāpiny Up 5〜6 & 10〜12.

もしもそのような説を提唱した者があれば、それはバーガヴァタ派の主流に属さない傍系にあたる何らかの未詳グループであったに相違ない。すでに述べたように、その数も少なく微かではあるが、現存するサンヒター聖典の中にシャンカラの指摘する問題点の(1)、つまり同定説、を裏付けるような痕跡が認められなくはないから、そのような独断的な説はもしもあったとしても『ブラフマ・スートラ』の論駁を受けて以後、おそらく次第に消滅していったのであろう。ちなみにヴューハ説そのものは、『バガヴァッド・ギーター』に知られていない。したがって、パンチャラートラの特異なヴューハ説は『バガヴァッド・ギーター』の時代以後になって、バーガヴァタ派が一神論の教義神学を組織化していく過程の中で初めてそれを構想したのか、もしくは外部の主張から採用したのであるかしたところの教説であったに違いない。この点はパンチャラートラの教説の起源に関連する複雑な問題をいくつか含んでいるから、いずれまた別の機会に詳しく検討することにして、今ここでは先に記した第一の同定説においてある程度見解の一致を見たナーラーヤニーヤ章さえもが、4ヴューハの間に順次生起の因果関係を認めようとする第2説に関してはシャンカラの意見を支持しない点について考察を進めることにしよう。

3.

すでに述べたように、ナーラーヤニーヤ章の記述（MBh 12.326.35–7 & 335.15–6）はシャンカラの註解をよく支持するがごとくに読める。しかし、その直後に続く原文に、パンチャラートラのヴューハ説が次のように要約されていることについても十分に注意を払う必要がある。

yo Vāsudevo Bhagavān kṣetra-jño nirguṇātmakaḥ /
jñeyaḥ sa eva Bhagavān jīvaḥ Saṅkarṣaṇaḥ prabhuḥ //
Saṅkarṣaṇāc ca Pradyumno mano-bhūtaḥ sa ucyate /
Pradyumnād yo 'niruddhas tu so 'haṅkāro maheśvaraḥ //
mattaḥ sarvaṃ saṃbhavati jagat sthāvara-jaṅgamam /
akṣaraṃ ca kṣaraṃ caiva sac cāsac caiva Nārada ! // (MBh 12.326.38〜40)

バガヴァットであるヴァースデーヴァは、その本性に属性なき知田者（cf. BhG 8.1 ff.）である。その彼バガヴァットそのものが、個我、すなわちサンカルシャナという支配者なり、と知るべきである。(38) サンカルシャナの後に、それ［バガヴァット］は意なるプラディユムナになる、と言われる。プラディユムナの後にアニルッダが生ずるが、それが自我意識なる大自在神である。(39) われ［ヴァースデーヴァ］から不動と動、不滅と滅、存在と非存在よりなる全世界が生起するのである、ナーラダよ。(40) Cf. also SS 3.5〜7 & 12〜3, 4.8〜12.

さらに、それよりも少し後の場所でヴァースデーヴァはみずから、

aham hi jīva-saṃjño vai, mayi jīvaḥ samāhitaḥ / (MBh 12.326.45cd)

われこそは個我と名づけられたるものに他ならず、われの中に個我はさだまれり。

とも語っている。したがって、これまでの引用部分におけるナーラーヤニーヤ章のヴューハ説は、「最高神のヴァースデーヴァがある一定の時間を経過した後にサンカルシャナに変身し、個我としてこの世に内在する」という教義になっていることがわかる。ただアニルッダの場合だけに神話と伝説上の痕跡が残されていて、MBh 12.326.36〜37では「アニルッダが、プラディユムナから生まれた (prasūta)」と表現されてはいる。しかし、上記の引用文の終結句である MBh 12.326.40と、それに加えて MBh 12.326.45ab においてもヴァースデーヴァがみずから「われは能作者 (kartṛ) であり、かつ結果 (kārya) であり、かつ原因 (kāraṇa) でもある」と語るところから判断すれば、同じ上の引用文 MBh 12.326.39 に用いられている二つの奪格 (Ablative) は各ヴューハの出自を示すのではなくして、時間上の前後関係を表現しているにすぎない、と理解しなければならない。のちになると『アヒルブドゥニヤ・サンヒター』(53.9cd-12) はこのような点を整理して、第1ヴューハのヴァースデーヴァがこの世のいかなる時間的概念の限定をも超越する絶対存在であるのに対して、サンカルシャナ以下の3ヴューハの行動には＜高次の時間＞ para kāla による作用の規制があることを言明している。

1) sthūlaḥ 2) sūkṣmaḥ 3) paraḥ kālas tri-vidho na parātmani // (9)
Vāsudeve pare Brahmaṇy avagāhanam arhati /
1) sthūlo lavādimān kālaḥ 2) sūkṣmas tattva-nirūpakaḥ // (10)

vyūhānāṃ ceṣṭita-vyāpī [3)]paraḥ kālo nirūpyate /
vyūha-trayasya bhavati kālena kalanaṃ sadā // (11)
Bhagavān Vāsudevas tu na vyūhenāpi kālavān /
vyūha-trayam apekṣyaiva kāla-vyūha-nirūpaṇam // (12)

[1)]粗大、[2)]微細、[3)]最高と≪時間≫には3種類あるが、最高我のヴァースデーヴァ、すなわち≪究極のブラフマン≫に潜入することはできない (cf. AS 2.46cd〜47ab)。粗大な時間は<瞬間>に始まる。微細な時間は、諸原理〔の開展〕を確定する。(10)〔下位の3〕ヴューハの行動に遍満するものと、<最高な時間>は定義されている。〔下位の〕3ヴューハは常に時間によって駆り立てられる。(11) しかし、バガヴァットのヴァースデーヴァはヴューハとしてさえも時間の限定を受けることがない〔永遠の存在である〕。〔下位の〕3ヴューハに関してのみ、時間的な顕現相であることが確定している。(12)

上に論じたようなヴューハ説解釈の妥当性は、同じ『マハーバーラタ』の第6巻 (Bhīṣma-parvan) に見出されるヴューハ説からもよく確認できるので、それを次に引用してみよう。

sṛṣṭvā Saṅkarṣaṇaṃ devaṃ svayam ātmānam ātmanā /
Kṛṣṇa! tvam ātmanāsrākṣīḥ Pradyumnaṃ cātma-saṃbhavaṃ //
Pradyumnāc cāniruddhaṃ tvaṃ yaṃ vidur Viṣṇuṃ avyayaṃ /
Aniruddho 'sṛjan māṃ vai Brahmānaṃ loka-dhāriṇaṃ //

(MBh 6.61.65〜66)

みずから親しく御身をサンカルシャナ神として創造した後に、クリシュナ〔=ヴァースデーヴァ、v.64〕よ、あなたは御自身で令息のプラディユムナを創造したまえり。(65) そうして、プラディユムナの後にアニルッダを、あなたは〔創造したまえり〕。そのようなあなたを、人々は不滅のヴィシュヌ神であると知ったのである。アニルッダが、この私、すなわちブラフマーを、世界の維持者として創造せり。(66)

ここでは、まず最初のシュローカ (MBh 6.61.65) から、「ヴァースデーヴァ・クリシュナみずからが自分自身を用いて (ātmanā)、サンカルシャナをも、プラディユムナをも創造する」のであることが判明し、さらに文頭に立つ Gerund (sṛṣṭvā) が、その間に時間的な前後関係のあることを明示している。したがって、後続する MBh 6.61.66a の意味するところは、当然そのような趣旨に呼応して、上記の訳文のように読まなければならない

であろう。この MBh 6.61.65–66 においては要するに、「最高神のヴィシュヌがみずから、サンカルシャナをも、プラディユムナをも、アニルッダをも、時間の間隔をおいて順次に生みだす」と説いているのである。後に述べるごとく、パンチャラートラの宇宙創造神話では、最高神がアニルッダとして生起した後に初めてブラフマー神が誕生して、この宇宙、つまり現象界の創造が実際に開始されることになっている。

『マハーバーラタ』のナーラーヤニーヤ章には、ヴューハ説がもう一か所に説かれている。それをも、ここで検討しておくことにしよう。

asman-mūrtiś caturthī yā, sāsṛjac cheṣam avyayaṃ /
sa hi Saṅkarṣaṇaḥ proktaḥ, Pradyumnaṃ so 'pi ajījanat //
Pradyumnād Aniruddho 'haṃ, sargo mama punaḥ punaḥ /
Aniruddhāt tathā Brahmā tatrādi-kamalodbhavaḥ // (MBh 12.326.68～69)

ここで第4形態 (caturthī mūrti) とされているのは、通常のヴューハ順位を逆転して、第1位ヴューハのヴァースデーヴァのことである。その彼がサンカルシャナという名で広く知られているバララーマ (Śeṣa)(14)を創造した (asṛjat)。ここまでのところに問題はない。しかし次の、「かれ [＝サンカルシャナ] もまた、プラディユムナを生んだ」という句には問題がのこる。「生んだ (ajījanat)」という表現は太初の創造神話に関する事柄であるから、もちろん許されよう。しかし、「かれもまた (so 'pi)」という部分は、次に続く「プラディユムナの後に、われ [＝バガヴァット、v.98] はアニルッダとなる」という句に対して、いかに見ても不釣り合いである。これは多数の写本による支持のある読み方であるが、もしもこの＜読み＞を許す場合には、『マハーバーラタ』第12巻のこの部分の伝承がパンチャラートラの教説の実状にほとんど関係なく継続したのであるか、または、シャンカラの指摘するヴューハの順次生起説が、ここにわずかな痕跡を残していることになるであろう。いま、前者の場合を議論する必要はない。

14) サンカルシャナとシェーシャとの神話的同一視は、この他にも多い。
Cf. e.g., MBh 1.61.91, 12.326.35, H Cr. Ed. 58.47, 90.4, VP 2.5.16 ff., 5.1.72, 9.29, 18.36–9, 25.1, 35.3, BhP 10.2.8, ĪS 20.270 & 274.

しかし後者の場合は、前にも述べたごとく、そのような見方が古代インドにおける神話・伝説圏の伝承事実に違反し、さらには、これも先に考察した MBh 6.61.65 と 12.326.39 における教説の実際にも首尾一貫してそぐわない。したがって、この場合 MBh 12.326.68d の読み方は「かれもまた(so 'pi)」という部分を、少なくとも別に他の二写本(Da 3 & 4)による支持のある「sāpi (sā = caturthī mūrti, v.68)」の読み方のほうに校訂して、「それ[=第4形態たるヴァースデーヴァ]は、またプラディユムナを生み出した」と理解しなければならない。こうしてはじめてナーラーヤニーヤ章のこの個所の意味が、ヴューハについて教説する大叙事詩『マハーバーラタ』の他の二か所に矛盾したり抵触することなく素直に通じあうことになるのである。今は紙面の制約から詳しい議論を差し控えるが、パンチャラートラのヴューハ説は記録に残る最初期以来、存在論上で絶対・全能なる最高神の存在形式、すなわち、具体的な<あり方>を機能別にタイプ分類しようと試みる、通俗的ではあるが純理論的教説である。換言すれば、それは、人間の思慮を絶する全く抽象的な最高神が宇宙の開展に向けて発現し始めると同時に、宇宙の盛衰と被造物の倫理的救済活動を遂行する目的でしだいに具体化する最初期の様相を、古来知られる「四分割構造」の理解[15]に立って組織づけた神学理論なのである。したがって、パンチャラートラの諸聖典中でヴューハ説への言及が、最高神としての本質をいささかも違えることのない「4形態〔一組の変容〕」、すなわち、

cātur-ātmya	SS 5.82–87 & 98, 7.76b, 9.44c & 51b, 25.94d, 183a & 345b, AS 5.21a, 26a & 44d, 16.84a, *passim,* LT 2.40–1, 7.8a 10.21 *et passim.*
mūrti-catuṣṭayam	MBh 12.326.43d, SS 4.7c (mūrti-catuṣka),
catur-mūrti	MBh 12.321.8b, SS 5.103, 8.121c, LT 17.46a; cf. SS 4.12a & 5.81a (ādi-mūrti),

と表現されることが多いのは、そのような理由によるのである。

15) 拙稿「ヒンドゥー教聖典の通用分類」、高野山大学仏教学会『仏教学会報』第15号(1990)、1〜11ページ参照。

次に引用する『アグニ・プラーナ』の一文は、素直に読めば、ヴューハの順次生起というシャンカラの理解をよく支持するであろう。しかしパンチャラートラの立場から見るかぎり、おそらく別の意味に解釈されていた可能性を排除することはできない。

ādi-mūrtir Vāsudevas tasmāt Saṅkarṣaṇo 'bhavat /
Saṅkarṣaṇāc ca Pradyumnaḥ Pradyumnād Aniruddhakaḥ // (AP 48.13)

第1形相のヴァースデーヴァは、その後にサンカルシャナとなった。サンカルシャナの後にプラディユムナとなり、プラディユムナの後にアニルッダとなった。

すでに周知されているとおり、大叙事詩『マハーバーラタ』の現形の形成史は非常に長い年月にわたり、そこには新旧さまざまな思想と教説が混在するから、パンチャラートラのヴューハ説が何種類か見出されても別に不思議はないと言えるかもしれない。しかしながら、後代のサンヒター聖典の教説に照らして終始一貫する見方が初期のナーラーヤニーヤ章その他『マハーバーラタ』のヴューハ説にまでさかのぼれるという事実が明らかになった今、そのような概説的抽象論を離れて、さらに一つより重要な問題に対する理解の鍵が与えられることになる。すなわち、パンチャラートラのヴューハ説における最高神バガヴァットの4現相とは、クリシュナを取り巻く現実的な親縁関係を最高神の世界に転移せしめて、大宇宙の創造が開始する直前に最高神の境涯に生ずる父と三子の関係になぞらえた一つの宇宙創造論を教義化したものらしい、という解釈が成立するであろう。そうしてこの場合、『アタルヴァ・ヴェーダ』の哲学讃歌に知られる最高原理のもつ観念の影響が、古代インドの宗教思想史に長く存続して、きわめて有効に働いている点を見逃すことはできない。

呪法讃歌の間々に古い民間信仰について伝える『アタルヴァ・ヴェーダ』において、宇宙の最高原理として有名なスカンバ (Skambha) 讃歌のアートマンは万有の父 (pitṛ) である、と同時にその子息 (putra) でもあった (AV 10.8.28)。しかし、パンチャラートラのヴューハ説との連関において、より一層重要視さるべき観念が見出されるのは「父である」(cf. AV 11.4.10b) ≪生気≫ Prāṇa が「その力によって、子の中に入った」

pitā putraṃ pra viveśa śacībhiḥ (AV 11.4.20)[*−〔付記〕]

という部分である。これは、父から子へと遺伝されていく生命の相続という、人々が最も身近に経験する世俗の現象に事寄せて、≪生気≫という神秘的で不可解な形而上学原理の宇宙的開展を、理知による抽象思考力になじまない一般の庶民たちにも納得のいくように教説するという目的にとっては実に都合のよい表現であり、また実例であったと見ることができるであろう。これは、すなわち、本質的な同一性をいささかも侵犯することなく、形象と属性の異なる諸存在が、それらとは別の何か一つのある根源的な存在から次々に生起する神秘を、古代の無教育な民衆のために説明づける見事な具体的比喩の一つであると言ってよい。同類の観念はウパニシャッドの時代にもなお消失してはいない。『ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』1. 5. 17 はそれをこの世の次元に移して「臨終のとき、父は5生気とともに息子に入る」[16] と教説し、『カウシータキ・ウパニシャッド』2. 15 は上に引用した AV 11. 4. 20 を葬送儀礼の一部にとり入れて、あたかも臨終の父と枕辺に坐る息子との間のやり取り (Saṃpradāna) に一種定式化しているごとくである。後に、サンスクリット文学史上純文学最高の大詩人として不朽の名声を語り継がれるカーリダーサが『ラグ・ヴァンシャ』の第1章で、心ひさしく王子の誕生を待ちわびるディリーパ王の

---

16) sa yadaivaṃvid asmāl lokāt praity, athaibhir eva prāṇaiḥ saha putram āviśati / (BAUp 1.5.17). これはsaṃpratti（伝達、または相続）という教説の一部であるが、その直後に putra の語を通俗語源的に解釈する。sa yady anena kiṃcid akṣṇayākṛtaṃ bhavati tasmād enaṃ sarvasmāt putro muñcati, tasmāt putro nāma / sa putreṇaivāsmiṃl loke pratitiṣṭhati / athainam ete daivāḥ prāṇā amṛtā āviśanti // 17.

さらに、cf. GopathaBr 1. 1. 2, pur nāma narakam ..... tasmāt trātīti putraḥ tat putrasya putratvam ; Nirukta 2. 11, putraḥ puru trāyate, niparaṇād vā, pun narakaṃ tatas trāyate ; MBh 1.68.38 = Manu 9.138, puṃ-nāmno narakād yasmād trāyate pitaraṃ sutaḥ / tasmāt putra iti proktaḥ. Also see MBh 1.69.19.

ことを *ātma*-janma-samutsuka[17]と表現し、また、シャクンタラーをみごもらせて見捨てたドゥフシャンタ王には saṃropite 'py *ātmani* dharmapatnī tyaktā mayā[18] と悔悟させている。

また、その中に生気をも含む(AV 19.53.7a)という最高神(prathamo devaḥ, AV 19.53.2d & 54.6d) としての≪時間≫ Kāla が同様にして、「万有の父でありながら、万有の子となる」(pitā sann abhavat putra eṣāṃ, AV 19.53.4 ; cf. AV 19.54.3)。そうして、「一切の主宰者」であるそのような≪時間≫は「創造主の父」なのでもあった。

Kālo ha sarvasyeśvaraḥ yaḥ pitāsīt prajāpateḥ (AV 19.53.8)
Kālo prajā asṛjata, Kālo agre prajāpatim / (AV 19.53.10)

最高原理の≪時間≫に賦与されたこの特性は、パンチャラートラのヴューハ説におけるアニルッダの役割[19]と完全に一致している。そうして、前

---

17) Raghuvaṃśa 1.33 : tasyām ātmānurūpāyām ātmajanma-samutsukaḥ /
vilambita-phalaiḥ kālaṃ sa nināya manorathaiḥ //
See Mallinātha ad : ātmano janma yasyāsāv ātmajanmā putraḥ / tasmin samutsukaḥ / yad vā, ātmano janmani putra-rūpeṇotpattau samutsukaḥ san / 'ātmā vai putra-nāmāsi' iti śruteḥ /. Cf. AitareyaUp 2nd adhyāya, esp. 2.3 : puruṣe ha vā ayam (i. e., Ātman) ādito garbho bhavati yad etad retaḥ / tad etat sarvebhyo 'ṅgebhyas tejaḥ saṃbhūtam ātmāny evātmānam bibharti / tad yadā striyāṃ siñcaty (cf. AV 6.11.2) athainaj janayati / tad asya prathamaṃ janma // 1 // … // 2 // … / taṃ strī garbhaṃ bibharti / so 'gra eva kumāraṃ janmano 'gre 'dhi bhāvayati / sa yat kumāraṃ janmano 'gre 'dhi bhāvayaty ātmānam eva tad bhāvayaty eṣāṃ lokānāṃ saṃtatyai / evaṃ saṃtatā hīme lokāḥ / tad asya dvitīyaṃ janma // 3 // ….. (also cf. ŚatBr 11.2.1.1 : trir hi vai puruṣo jāyate, etc. and Jaiminīya UpBr 3.8.9–10).

18) Abhijñānaśakuntalam 6.24a (NSP ed.). Cf. ĀśvalāyanaGS 1.15.9 = MBh 1.68.62c (ātmā vai putra-nāmāsi /). さらに、see *infra* and Note 22.

19) Cf. e.g., MBh 6.61.66, 12.326.69, and 12.326.37 :
yasmāt sarvaṃ prabhavati jagat sthāvara-jaṅgamam / so 'niruddhaḥ.
Also see, puruṣaḥ śaktir ity etac cetanācetanātmakam /
vardhayety Aniruddhāya Pradyumnenopapādyate //

にも言及したサンカルシャナ以下の下位3ヴューハの行動を＜高次の時間＞ para kāla においてとらえる『アヒルブドゥニヤ・サンヒター』53.9 cd–12 の立場は明らかに『アタルヴァ・ヴェーダ』のこの≪時間≫と無関係ではありえない。

以上のようにして古代インドでは、宇宙創造が始まる直前の神話的世界に万有の直接の創造主 (Prajāpati) を出現させるための教義理論上の根拠として、最高神と宇宙創造主との間に、世俗に見られる父子関係を利用しようとする、という思考が非常に古くから存続していたことがわかる。そうして、また一方では、「夫が妻の胎内から子として再生する」という観念[20]がインドには古くからあり、父と子とを同一視[21]して、父・子の間に転生する相続をも認めていた。このような傾向は『マハーバーラタ』1. 62～69 の有名な挿話、シャクンタラーの物語[22]や上記の『ラグ・ヴァン

---

antaḥ-stha-puruṣāṃ śaktiṃ tām ādāya sva-mūrti-gām /
saṃvardhayati yogena hy Aniruddhaḥ sva-tejasā //
(AS 6.13–4)

and PS 2.101b (Aniruddhas sakaleśvaraḥ /), TT p. 127 (Aniruddhaḥ ..... miśra-sṛṣṭer nirvāhakaḥ).

20) patir jāyāṃ praviśati garbho bhūtvā sa mātaram /
tasyāṃ punar navo bhūtvā daśame māsi jāyate // (AitBr 7.13.9)
辻直四郎『古代インドの説話――ブラーフマナ文献より』、春秋社・昭和53年、3 & 13ページ (訳注 3) 参照。See Mallinātha ad *Raghuvaṃśa* 2.1, and : patir bhāryāṃ saṃpraviśya garbho bhūtveha jāyate / (Manu 9.8).
さらに、YājSm 1.56 : tatrāyaṃ jāyate svayam.

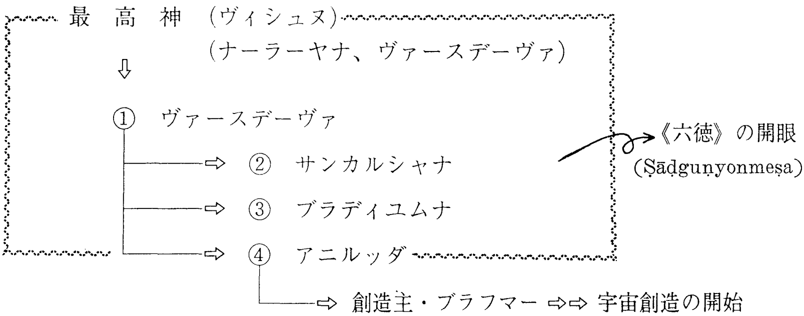
21) ya u vai putraḥ sa pitā, yaḥ pitā sa putraḥ (ŚatBr 12.4.3.1).
See J. Gonda, *Some Observations on the Relations between "Gods" and "Powers" in the Veda*, A Propos of the Phrase *sūnuḥ sahasaḥ*, 's-Gravenhage 1957, pp.10–11, and also E. Windisch, *Buddha's Geburt und die Lehre von der Seelenwanderung*, Leipzig 1908, p. 62.

22) bhastrā mātā pituḥ putro yena jātaḥ sa eva saḥ //
(MBh 1.69.29 & 1.90.31ab = BhP 9.20.21)
母は皮袋［の保養器］であり、息子は父に属する。彼によって生れたものは、彼そのものである。

シャ』に一つの実例を見るごとく後世にまで長く伝えられたから、ブラーフマナ文献を始めとする厖大なヴェーダ諸文献中の創造神話を入念に調査すれば、同種の思考形態に関してより一層多面的なアプローチと議論とを行いうる可能性が予想できるが、しかしそれは将来の研究課題に属する問題である。

4.

パンチャラートラの最高神とヴューハ4柱神の変現、そこから始まる宇宙創造の相互関係を図示してみれば、次のごとくになるであろう。



この図式からも明らかなように、『マハーバーラタ』第12巻のナーラーヤニーヤ章におけるヴューハ説は因果関係による順次生起を意図するもので

tvad-aṅgebhyaḥ prasūto 'yaṃ puruṣāt puruṣo 'paraḥ /
sarasīvāmale "tmānaṃ dvitīyaṃ paśya me sutam //
yathā hy āhavanīyo 'gnir gārhapatyāt praṇīyate /
tathā tvattaḥ prasūto 'yaṃ tvam ekaḥ san dvidhā kṛtaḥ //
(MBh 1.68.64-5)

ātmātmanaiva janitaḥ putra ity ucyate budhaiḥ / (MBh 1.68.47).

ātmā vai putra-nāmāsi (MBh 1.68.62c, KauĀr 4.11, Nirukta 3.4, ĀśvalāyanaGS 1.15.9) ; cf. P. V. Kane, *HDhS* Vol. 3, Poona 1964, p. 641 nt. 1220. saṃropite 'py ātmani (Abhijñāna-Śakuntalam 6.24, NSP 1958, p. 228). Also cf. Manu 4.184 : bhrātā jyeṣṭhaḥ samaḥ pitrā, bhāryā putraḥ svakā tanuḥ // .

はない。その教義の特質は、創造主ブラフマーが誕生するまでの太初の神話的な宇宙の開闢時に、第1ヴューハに転位した最高神が、時間の推移につれて下位の3ヴューハに順次その姿を変えて顕在化していくことを説く点にある。そのようなプロセスが経過していく中で、ヴィシュヌ派の神話では宇宙創造の開始がしだいに分明に具体化するのである。ヴューハの教説は、このことを通俗的に誰にもわかりやすく教示するための一方策なのであった。ここでは深く立ち入らないけれど、後代のサンヒター文献が解説するヴューハ説は主としてこの方向に沿って解釈しなければ理解できない。ヴィシュヌ派の最高神がそのように擬人化されたヴューハ4柱神の姿をとって変現する点を、たとえば『ラクシュミー・タントラ』(2.54〜56)は、同じ一人の有能な役者(naṭa)が表情や身のこなし方、衣装や小道具をさまざまにとり代えて役作りにいろいろと工夫をこらし、複数の演劇において各個に相異なる役割を見事に演じわけて、さながら観客の喝采を呼び起こす情景までも想像させるような巧みな比喩でもって説明している。(23)

このようにして、パンチャラートラ本来のヴューハ説とは、時間的に相前後して変貌する最高神それ自身の「4現相の継起」に関する教説であったから、下位の3ヴューハをそれぞれ＜個我＞とか、＜意＞とか、＜自我意識＞とかに同定して表示する必要はまったくないわけであり、この点からしても後代のサンヒター文献はヴューハ説における他原理への同定表現に、ほとんど関心を示さず、また固執しないのであろう。ナーラーヤニーヤ章以来サンヒター聖典の中にわずかに残る同定表示は、おそらく一種完成されたとも言える古くから有力なサーンキヤ学派の創造理論に立って、むしろ、本来の純一無垢な精神原理、すなわち宇宙論上の≪意識≫または≪心性≫ jñāna or cit、あるいは宇宙的な≪生命≫が 1)jīva ⇨ 2)manas (or buddhi) ⇨ 3)ahaṅkāra へと世俗的現実の＜心＞に向かって変貌していく

23) 拙稿「Pāñcarātra Saṃhitā にみえる Vyūha 説」、『印度学仏教学研究』第15巻・第2号(昭和42年)、144〜45ページ参照。さらに、cf. MaitriUp 4.2 (naṭa iva kṣaṇa-veṣam) & Pañcadasī Ch. 10 (detailed).

様相を分明かつ率直に図式化していると見たほうが通俗的宗教の教説としてはより一層自然である。『ブラフマ・スートラ』を註解するシャンカラもまた現象世界（vyavahārāvasthā）という場に関するかぎり、基本的にはサーンキヤ学派と同じく因中有果論による世界展開を承認した。しかし、そのときシャンカラが世界創造の根本原理とするのはマーヤーまたはシャクティと結合して人格化された主宰神（īśvara or parameśvara）であって、究極的真理の場（paramārthāvasthā）における絶対者ブラフマンではない。(24) これに反してヴィシュヌ派の場合には、通俗宗教としてそのような認識論上の立場を区別しないから、宇宙の創造説は、あくまでも絶対の最高原理である最高神のごく僅少な一部分から転変し拡散していく多様な現象世界の、本来の意味における sṛṣṭi or sarga（<√sṛj）に他ならない。このような創造過程の中においてはじめて、輪廻（saṃsāra）の生存が無限に繰り返されると見るのである。

パンチャラートラのヴューハ説は、高次とはいえ時間の範疇における、いわば精神的存在論上の因果関係にもとづいている。そのとき下位の3ヴューハはそれぞれ、もちろん先行する上位ヴューハの結果（kārya）であり、かつ結果としての様相にも機能にも個体としての相違が歴然としている。したがって、この意味においてのみ、それを認識論上の因果関係として見ることを許されるであろう。しかし、その因果関係は同じ最高存在者の本体論上における自己転変なのであるから、決して因果を結ぶ各形態間の本質にかかわるような問題を存在論上にも認識論上にも内包してはいない。それは、すでに絶対の精神原理である最高神の実在をアプリオリな前提とした上で教説する、いわば純粋の精神的な因中有果論の立場である。シャンカラの伝えるヴェーダーンタ学派の論難は、おそらく、ヴィシュヌ派有神論説のこのような点に配慮したものなのであった。そうして、この

24） 中村元『シャンカラの思想』〔インド哲学思想・第5巻〕、岩波書店 1989、261-7, 303-6, 314-5ページ。前田専学『ヴェーダーンタの哲学』、サーラ叢書24、平楽寺書店 1980、111ページ以下。

点には好意的に同調して、理論家のシャンカラは『ブラフマ・スートラ』の同所において「パンチャラートラの定説」の中でもヴューハ説の特異点のみを論駁することによって上記の点についてこれを言外に含めて確認しようとしたのであったのかもしれない。しかし、パンチャラートラの4ヴューハは「現象（vyavahāra）の場」における結果（kārya）ではない。それは、この現象世界が生起するよりもはるか以前に始まる、宇宙開闢ドラマの開幕を告げる最高神みずからの自己転変であるから、シャンカラで言えば「勝義（paramārtha）の場」における実在ブラフマンの自己開展に相当するであろう。このような認識論上の勝義界に属する最高原理に自己開展を認めて、そこにサーンキヤ学説の原理名を適用することの可否が当然シャンカラとしては問題となるべきところであった。

5.

上来の考察から結論としては、次のように言えるであろう。ヴューハ説というパンチャラートラに独特の教説は『マハーバーラタ』のナーラーヤニーヤ章以来、神話的宗教思想としての一貫性を失うことがない。そうして、とくに古い同定表現を明らかに保存しているナーラーヤニーヤ章は、このヴューハ説以外にも部分的にではあるが、パンチャラートラの古い教義神学を伝える最初期の文献であると見ることができる。このようなナーラーヤニーヤ章のおおよその成立年代として『ブラフマ・スートラ』の成立期と同時代である紀元後5世紀のころか、それよりも少し以前を予想しておけば大過なきものと思われ、この年代設定は、大叙事詩『マハーバーラタ』の現形が成立したであろうと一般に考えられている年代ともうまく符合するのである。

なお、最後にバーガヴァタ派との関連から一言すれば、ナーラーヤニーヤ章は『バガヴァッド・ギーター』の存在について2度にわたって言及しているから、したがって『ギーター』の教説を、すでにその教義の前提としていることが十分に予想できる。ナーラーヤニーヤ章は、クル族とパー

ンダヴァ族の両軍の布陣が終って、あの大戦争の戦端がまさに切って落されようとするその時に、常日頃から相親しく互いに尊敬する同族の縁者たちが敵と味方に分裂して格闘し、その果てには殺しあわねばならないという運命に悲嘆この上なく意気消沈した戦士、いつもは勇敢無比なる英雄アルジュナに対して「バガヴァットみずからが歌いあげた道（gītā Bhagavatā svayam）をここでも教示した」と述べ（MBh 12.336.8-9）て、さらに、誓戒ある人のダルマ（vratināṃ dharmaḥ）については≪ハリ・ギーター≫への言及がある（MBh 12.336.49)。そうして、MBh 12.324.49 の「光輪につつまれて見ることもできないあのバガヴァット」sa Bhagavān prabhā-maṇḍala-durdṛśaḥ という表現は、明らかに BhG 11.17 & 19 を予想している。唯一神の信奉者である Ekāntin たちが最終的には「最高神の中に入る」（MBh 12.337.67）というパンチャラートラの≪解脱観≫もまた『ギーター』の教説によく準拠している。[25] しかし、ナーラーヤニーヤ章において「バガヴァット」と呼ばれ、特別に尊崇されている最高神ナーラーヤナ（e.g., MBh 12.333.25, 337.63-64）の名は『バガヴァッド・ギーター』の中にまだ現れてはいない。

25）この点については、註3の前掲拙稿6～7ページを参照。また、*Bhagavad-gītā* の一神教的性格について、同24ページ以下。

*〔付記〕通俗宗教の立場から見るかぎり、インド・ヨーロッパ祖語につらなる語源解釈は第二義的であり、必ずしもその精確を要求されないであろう。したがって、本稿では煩雑にわたるのを避けて、ヴェーダ文献または Vedic Sanskrit のアクセント符号をすべて省略した。